

部落の分校に通っているが、何としても医者に診察してもらいたかった。市内に住めば、引揚者は無料で診てもらえるときけば、矢も楯もなくなる。いよいよ私ども親子はとにかくここを出ることに、ここを固めた。丁度そのころ、市の引揚者住宅として戦前の建物を改造する情報を耳にしたので、市に日参の末、管理人という名目で入居の許可をえた、天にものはる心地とはこのこと。この強行手段は娘の健康のためという大義名分が立った。すぐ無料診療の手続きをすます。ホッとした。

二、三年前、よくお母さん、かつては一本八十円もの注射をさせてくれたわね、と娘にいわれて、忘れていたことを思い出した。

煮たきする薪がされると次男は学校の帰途木のはしっこを方々から拾ってきて私を助けてくれた。

長男は寮の共同畑に下肥かけにつとめてくれた。

今度は、夫が北海道電力会社に就職し、ようやく人並の生活をおくれる目安がついた。

わずか三年足らずの間でしたがめまぐるしい人生の

縮図とでも言おうか、私たち五人が一本の糸に結ばれて、この苦しみを克服してきたことを、ただでは済まされない、この気持ちを、わが子にこの手紙を残したいと思う。

上海から引揚げまで

群馬県 乾

キチ

昭和十七年十二月、生まれて初めて見る異国、上海に着き、主人を迎えられ、杭州という町で、新しい生活が始まりました。主人は半官半民経営の華中運輸に勤務しておりました。半年ほど平和に暮らすうちに、転勤で昭孔という町に今でいう単身赴任となりました。当時としては、その町は非常に治安が悪く、婦女子は危険で、居住不能な所でした。異国での別居生活はたいへん淋しい暮らしでした。

杭州では女子徴用工として、自動車の部品等の荷造り運搬の作業でした。そんな生活の中で妊娠したので、

不安になったり、又主人は仕事が忙しいので、月一回ぐらいしか帰ってきませんでした。

十九年一月三十日、長女を出産。そして徴用からは解除となりましたが、日が立つうちに空襲も激しさを増し、その度ごとに子供を連れて防空壕へと避難の連続でした。

そんな生活をくりかえすうちに八月十五日の終戦を迎えた。九月十五日、同じ会社社に勤務の日本人全員官舎を引き払い上海に集結しましたが、主人達三人ほどが会社の残務整理で現地昭孔に居残りしましたが、そのうち主人は八路军の監視がきびしい中を夜間のクリークを小船で脱出して、命からがら上海まで逃げてきて、やっと家族と合流しました。

まず生活の安定を確保しなければ生きていけません。そこで思いついたのは収容所の一部を開放して、コーヒー、ラーメン等の軽飲食店を始めたが、五か月程で日本人は商売してはいけないということで、閉店しました。

更に、朝八時から夕方六時まで外出禁止になり、又

子供達が拉致されたり、女達が連行され、日増しに八路军による暴行や強奪など日一日ときびしい生活を強いられる状態が続きました。

そんな時、仲間の奥さんが産気づき、どしゃぶりの雨の中、産婆さんを迎えに行き、お産は無事に済んだが、一週間ほどで幼児は死亡、火葬場に行く道すがら、至る所で日本人と見ると金品を要求され、ようやくお骨にして、収容所に持ち帰りました。

そんな中で、つぎつぎと子供達は栄養失調、伝染病に倒れ死亡して行く姿を見守りながら、自分の家族にも不幸が起るのではないかと毎日が心配の連続でした。

そんな時、突然引揚げ開始となり、第一便が十二月三十日と決定、みんな一日も早く日本に帰りたいと思っていた矢先、妊娠と気づき、最終の引揚げ船で帰国することにしました。

昭和二十一年四月二日、やっと待ちに待った引揚げ船に乗りこむことになりました。私達が最終便。

さあ、出発と外に出たら、待ってましたとばかり、

長い竹竿の先に釘をさして、荷物を遠くから引っかけ
て奪って遁走する方法で、荷物は取られました。又、
上海の集合地点でも、荷物点検等にして貴重品一点限
りで、全部没収されました。

いよいよ日本に帰れるのだと非常によるこんで乗船
して三日後に博多に上陸という所で、一人のコレラ患
者が出、一週間船上生活となり、一変して、食事、洗
濯、水にいたるまで、一切がチップ次第で、金がなけ
れば、生活できなかつた。

博多の土を踏んだ時は、家族全員が疲れはて、動く
こともできず、乳幼児もいることで、博多の旅館で二
泊して、主人の故郷の嬉恋村へと向かうことになりま
した。

駅に向かう途中八百屋さんの店先に二つだけの夏蜜
柑を買い求めて乗りこんで途中食べ物があるだろ
うと思つて乗車したが当時は駅の売店もなければ、水
もない、京都に着いたら、駅構内に水道があり其の水
は今でも忘れない味だつた。そして二日間の旅は夏蜜
柑二つで四人家族で生きられたことを想うと、人間の

強さは常識で考えられないものがある。

然し電車の中は満席で幼児をしつかり抱き続けたた
めに食糧不足と又体力の限界で動けなくなり、その
まゝ寝こんでしまった。

あれから四十有余年今年も満州の避難する時に別れ
た子供達が肉親さがしに来日している。

中国の育ての親も歳をとり、亡くなった人もいる、
生みの日本の親も老齡化し、だん／＼肉親との再会も
難しくなっています。

もう十年も早かつたらとなげいています。

私達は全員無事に引揚げたので不幸中の幸いでし
た。

万里の長城よサラバ——張家口脱

出の記——

石川県 中山 隆

七月になると市内に日本軍の往来が目だつようにな